様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２７９０

研究課題名（和文）日本の社会構造変化と敬語の簡素化　～話題敬語から対者敬語へ～

研究課題名（英文）The structual change of Japanese society and the simplification of honorific language

研究代表者
田辺　和子（TANABE, Kazuko）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：６０１８８３５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「いく（行く）」の敬語形「いらっしゃる」と「いかれる」の使用実態調査を、①主婦対象、②雇用形態別に行なった。その結果、「いく（行く）」の敬語形としての「いらっしゃる」に代わって、「いかれる」の使用が、いずれの調査でも拡大していることが明らかになった。埼玉県の主婦も大阪出身の主婦もいずれも、「いらっしゃる」は、「自分は使わない」と答えた割合が、「行かれる」のそれより高かった。また、「いかれますか」は、男性非正規雇用者において使用度が高かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって、敬語形としての「行かれる」の拡張、「いらっしゃる」の衰退という現代日本社会における敬語の変化の実態が明らかになった。教育現場では、日本人に対する国語教育においても、外国人に対する日本語教育でも、教科書の記述では、「いらっしゃる」が非常に重んじられている。実際には、「行かれる」の使用は、歴史コーパスによると1880年代にも確認でき、敬語の簡素化、明晰化が進行していて、現実と教育の隔たりが大きくなっていることが明示できた。

研究成果の概要（英文）：We conducted a survey on the actual usage of "irassharu" and "ikareru," which are honorific forms of "iku (go)," by (1) housewives and (2) employment status. The results revealed that the use of "ikareru" has expanded in both surveys, replacing "irassharu" as the honorific form of "iku (go)." For housewives from Saitama and Osaka, a higher percentage of respondents answered that they do not use "irassharu" compared to "ikareru." Moreover, the use of " ikaremasu (conjugated form of ikareru)" was higher among male non-regular employees.

研究分野：社会言語学

キーワード：敬語の簡素化　敬語の明晰化　行かれる　いらっしゃる　敬語使用の変化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、敬語の使用に大きな変化が見られるようになった。例えば、特別な敬語形（「行く」に対する「いらっしゃる」、「言う」に対しての「おっしゃる」、「見る」に対しての「ご覧になる」）の使用頻度が激減している。年齢が下がるにしたがって、待遇表現の知識も曖昧になる傾向が顕著である。この現象は、日本の社会構造の変化と密接に結びついていて、職場や社会の人間関係の在り方や価値観の変化に起因するものと考えられる。近年の職場環境は、非正規雇用が増え、終身雇用体制の見直しがなされている。このような状況の中で、周囲の人々への配慮としての待遇表現の使用は、身分・地位の上下関係を基盤としたやや固定的な敬語使用から、聞き手への配慮を重視した流動的な丁寧語使用へと移行している。

２．研究の目的

本研究では、日本語の敬語の経年変化を調査し、その形態や変化のメカニズムを明らかにすることを試みた。日本語の敬語は、従来、話題の人に敬語を使う「話題敬語」の特色を有していたが、近年、聞き手への配慮を大切にする「対者敬語」へと移行しながら、急速に簡素化の傾向を見せている。本研究では、その変化の状況を把握するとともに、「なぜ、21 世紀のいま、変化するのか」、その原因を日本の社会構造の変化に起因するものとして考察を行った。日本社会は、過去において均質性の高い共同体的組織から多様化・高齢化が進み敬語使用の判断となる相対的身分関係の判断がつきにくい社会となってきている。本研究では、その社会構造の変化と敬語使用の意識の変化との関係を分析することを目的とした。

３．研究の方法

成人向け話題敬語と対者敬語の共存実態調査として、2017 年から 2018 年には、次の二件のアンケート調査を行った。

（１）母親対象の敬語使用調査

埼玉学習塾・大阪出身（東京在住）・その他のそれぞれの母親を対象に、子供と先生のことを話題にするとき、どんな言葉を「使う」か尋ねた。また、自分は使わなくても、他人が使っているのを聞いて「自然と思う」か、「不自然と思う」か、6 種の変異形（「行くの」「行かれるの」「いらっしゃるの」「おいでになるの」「お越しになるの」「お見えになるの」）について答えてもらった。インタビュー方法としては、「記憶時間の調査法」という手法で、いつどんな躾を敬語使用において受けたか「敬語の自分史」を尋ねる方法で、敬語の簡素化の実態を把握した。

（２）雇用形態別敬語変異形使用実態調査

学生と先生の会話に、さまざまな立場の人物を登場させ、敬語を誰に対してどのようなレベルの敬語を使用するか、雇用形態別（正規雇用、非正規雇用、アルバイト）にアンケートをして、敬語使用の意識の比較をした。また、本研究では、質的研究も行い、できるだけ量的研究と質的研究を統合した「混合研究法」を採用するようにした。この方針により、非正規雇用の人に、職場での敬語使用の判断に迷う場合などについてインタビューも行った。また、文京区のシルバー人材センターに登録している人にもインタビューし、派遣先で自分より年下の人々の自分へ対しての言葉遣い、また、自分自身の言葉遣いで迷うところなどの資料を集めた。

４．研究成果

（１）母親対象の敬語使用調査結果

質問

学校の先生について自分の子供と話すとき、次の会話の（ ）の中には、どんな言葉を使いますか。

会話

母親：「来週の遠足、橋本先生、いっしょに（　　）。」

子供：「うん、行くと思うよ。」

結果

埼玉の学習塾の母親は、圧倒的に「行くの」と普通体を選び、次は「行かれるの」「いら

っしゃるの」の順番であった。大阪出身の母親は、方言形を除けば、「行かれるの」が「いらっしゃるの」を大きく上回った。その他の出身の母親は、「行かれるの」が「いらっしゃるの」を若干上回った。敬語の特殊形の排除と規則形の拡張傾向が認められた。

（２）雇用形態別敬語変異形使用実態調査結果

本調査は、546 人の社会人（被雇用者）を対象に、聞き手や話題の人の地位や親疎で、どのように「いく」の敬語形の使い分けをしているのか調査をした。この調査では、「いく」の敬語体の変位形の使い分けが雇用形態別に異なることを証明するためにカテゴリカル主成分分析という統計手法を用いて分析した。

質問

田中先生が明日バレーボールの大会に行くか、8 つのカテゴリーの人にそれぞれ尋ねてください。その際、「いく」に関してどのような言葉を使いますか。下の 6 つの中から選んでください。

8 種のカテゴリー：尋ねる人

１．　校長先生	５．クラスメート
２．　田中先生の同僚の先生	６．親しい友人
３．　清掃員の人	７．後輩
４．　先輩	８．兄弟・姉妹

6 種の「いく」の変異形

1．　いらっしゃいますか	4．　いらっしゃる
2．　いかれますか	5．　いかれる
3．　いきますか	6．　いく

結果

男性正規雇用者は、尋ねる相手が校長先生でも田中先生の同僚の先生でも「いかれますか」を選び、女性は、雇用形態に関係なく「いらっしゃいますか」を選ぶ傾向があることが明らかになった。雇用形態と性別が、変異形の選択に関わっているということである。尋ねる相手が清掃員や先輩になるとこの傾向は統計的数値には、現れにくくなる。

（３）まとめ

敬語使用について、話題敬語と対者敬語の違いを明確にして、二元的に日本の敬語が使い分けられている構造と、現代日本の社会的変化との相関を統計的な手法で考察した。そして、さらに、社会言語学に計量国語学的アプローチを組み合わせたと同時に、質的研究も加え、研究方法の多元化を実践した。研究方法の多元化により、様々な方向から現在の敬語の使用状況を確認することができた。今後の研究も、この研究法により有意義な結果を得ることが期待できよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 田邊和子・小池恵子	４．巻 61
２．論文標題 「～でいらっしゃる/おられる」の使用における混合研究法による分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国文目白	６．最初と最後の頁 26－40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kazuko Tanabe	４．巻 71
２．論文標題 An Attempt to Observe Changes in Speech by Utilizing the Yahoo Search Enginge	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本女子大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 33－44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上史雄	４．巻 51
２．論文標題 日韓社会言語学研究の動向と展望	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本学　The IIbon Hak	６．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Fumio Inoue	４．巻 21
２．論文標題 Standard Language Distribution in LAJ and Railway Distance	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Dialectologia: revista electrnica	６．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井上史雄	4．巻 24
2．論文標題 Dialect　Vocabulary changes over 140 years　Standardization and new dialect forms	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Dialectologia : et Geolinguistica	6．最初と最後の頁 105-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田邊和子・小池恵子	4．巻 59
2．論文標題 敬語の簡素化と明晰化	5．発行年 2020年
3．雑誌名 國文目白	6．最初と最後の頁 104-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kazuko Tanabe	4．巻 68
2．論文標題 Use of "like" by English Speakers as a Filler in Japanese Conversation	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本女子大学紀要	6．最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野口潔、田辺和子、大須賀茂、岡田彩	4．巻 29
2．論文標題 上級日本語クラスでのクリティカルシンキングを採り入れたリレー式創作文活動	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Lingua	6．最初と最後の頁 135-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田邊和子	４．巻 Vol.117　No.341
２．論文標題 日本の家庭における話題敬語の継承の分析	５．発行年 2017年
３．雑誌名 電子情報通信学会 技術研究報告	６．最初と最後の頁 pp7-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　1件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 The Simplification of Honorific Language in Japanese in the Globalized age
３．学会等名 17th International Pragmatic Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 Mutual learning between Japanese native speakers and second learners through collaborative writing
３．学会等名 World Congress of Applied Linguistics（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田邊和子・小池恵子
２．発表標題 「名詞＋でいらっしゃる・おられる」の使用実態調査と分析
３．学会等名 Practicing Japan -35 years of Japanese Studies in Pozan and Krakow（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 田邊和子
２．発表標題 日英パラレルコーパスを利用した語彙教材作成の工夫と課題
３．学会等名 データ駆動型学習DDLを取り入れた言語教育　シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 Influence of Globalization on the Use of Honorifics in Japanese
３．学会等名 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 The contsruction of Multicultural Society in Japan: Observation on Landscape Linguisitics
３．学会等名 第17回　国際都市言語学会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 Simplification of Honorific Language Use in Japanese
３．学会等名 International Congress of Linguists（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kiyoshi Noguchi, Kazuko Tanabe, Shigeru Osuka, Aya Okada
２．発表標題 クリティカルシンキングを採り入れたリレー式活動ー上級作文クラスからの実践報告ー
３．学会等名 国際日本語教育学会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 Changes in the Use of the Japanese honorific "Irassharu"
３．学会等名 The 6th JSA Asean Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kiyoshi Noguchi, Aya Okada, Kazuko Tanabe, Shigeru Osuka
２．発表標題 ストリートマップ等の支援ツールを使った上級クラスでの創作文指導
３．学会等名 Southeastern Association of Teachers of Japanese Conference
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shiegeru Osuka, Kiyoshi Noguchi, Kazuko Tanabe, Aya Okada
２．発表標題 21世紀型日本語作文教育の評価法についての一考察
３．学会等名 American Association of Teachers of Japanese
４．発表年 2018年

１．発表者名 田邊和子
２．発表標題 日本の家庭における話題敬語の継承の分析
３．学会等名 電子情報通信学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 田邊和子
２．発表標題 「いらっしゃる」から「行かれる」への言語使用変化に関する分析
３．学会等名 2017年度日本語学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 Analysis of Japanese Honorific Usage Succession in the Home Using Mixed-Methods Research
３．学会等名 Methods in Dialectology XVI
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 The Regularization-change of Language use of IRASSHARU in Japanese Honorifics
３．学会等名 23rd International Conference on Historical Linguistics
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kazuko Tanabe
２．発表標題 Transformation of the Japanese Honorific Style from Referenced Person to Listener
３．学会等名 15th International Pragmatics Conference
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Kazuko Tanabe, David Britain, Salvatore Carlino, Hsiao-feng Cheng, Kevin Heffernan, Keiko Hirano, Rika Ito, Brian Jose, Yuji Kawaguchi SuguruKawase, Nobuko Kibe, Lex Konnelly, Mihoko Kubota, Stepehn Levey, Lozong Lhamo 他23名	４．発行年 2020年
２．出版社 Peter Lang	５．総ページ数 296
３．書名 Proceedings of Methods XVI	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井上　史雄 (INOUE Fumio) (40011332)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関